



啓蒙期の道徳哲学にたいする アダム・スミスの寄与

モラル・サイコロジーにもとづく徳倫理の諸分類について

上野 大樹 (一橋大学)

イントロダクションA

啓蒙の道德哲学像の転換——理性と情念（1）

- 哲学・倫理学においては18世紀を「理性の世紀」ととらえ、啓蒙思想をカントなどに代表される**合理主義**や**批判的理性使用**によって特徴づける見方は根強い。
- それを前提に、現代の倫理学では人間の道德的判断における**経験的要素**や**感覚論的・感情主義的・情動（情念）論的**な側面を重視する観点から、啓蒙主義的な道德哲学を批判的にとらえる傾向が存在する。
 - 動機づけの脆弱性（cf. 外在主義、ヒューム主義＝信念と欲求の区別？）
 - 道德認識・道德判断における理性の限定的役割（ヒューム的な信念と欲求の区別？）
- しかし近年の思想史研究の成果を踏まえると、そもそも啓蒙思想をこうしたイメージでとらえること自体に大きな留保が必要。
 - 啓蒙思想には経験論的・感覚論的・感情主義的な道德哲学も一大潮流として存在（ローティらの啓蒙像）。
 - じゅうらい“普遍的理性にもとづく道德の先驗的基礎づけ”という一面にもっぱら焦点が当てられてきたカントの多様な側面（道德・実践哲学から相対的に自立した政治哲学・歴史哲学、現実の人間観察にもとづき世界の常識の改善をめざすモラリスト的関心ないし実用的人間学、経験的心理学、徳倫理を継承する格率倫理学）への注目。

イントロダクションA

啓蒙の道德哲学像の転換——理性と情念（2）

- 本発表の目的：こうした啓蒙像の転回を典型的に示すスコットランド啓蒙研究の進展をふまえ、アダム・スミスの道德哲学に注目してその内的構造を概観し、現代倫理学の問題関心に相当程度まで応答しうる啓蒙哲学の特徴を明らかにする。
- **目標 (1)**: 倫理学の領域でもスミス『道德感情論』の研究は一定程度は存在するが、本発表ではこれまであまり検討されてこなかった「観察者」としての自己形成と「行為者」としての自己形成との発達心理学的な関係性を論じる。
- **目標 (2)**: 上記の道德心理学の発達論的構造をふまえることで、スミスの徳倫理（これ自体は近年研究が出てきている）のなかでほとんど解明されてこなかった徳の分類（友愛の美德 vs 立派さ・尊厳としての美德）の重要性を理解することができる。この徳倫理の分類学が、スミスの道德心理学と文明社会論とを関連づける鍵である。
- **目標 (3)**: 現代の価値理論（FA理論）との親近性をあきらかにする。さらに、スミス道德哲学の理解をつうじて道德認識論・判断論と徳倫理のあいだの連関を示唆する。

1. スミス道徳心理学の発達論的構造

— 「観察する者」から「観察される者」へ

議論の要点

- ▶ 「観察者理論」の一般的イメージにたいする留保。
スミスの理論の強調点は、観察者よりも「観察者を意識する行為者」にある。
- ▶ しばしば一緒くたにされがちな「**社会的動物**」の人間学の二側面、つまり「**相互的共感**」の二要素を区別することが、スミス道徳心理学の理解の要諦。
 - “共感したいという欲求”と“共感されたいという欲求”（承認欲求）の区別。
 - 一義的には前者は“**観察者**としての自己”、後者は“**行為者**としての自己”の道徳的能力。
 - 発達心理学的なステージとの相関。前者に続いて後者の反省的能力が発展する。
- ▶ 前反省的な他者への関心・共感性（第一ステージ）にたいする自己意識的・再帰的な他者への関心（第二ステージ）の優位にもとづく道徳理論。並列的理解の修正。
(共感的観察者 vs 自己反省的行為者)

1. スミス道徳心理学の発達論的構造 — 「観察する者」から「観察される者」へ (1)

- ▶ "disinterested spectating": 『道徳感情論』冒頭のアダム・スミスの主義的性格 (cf. ヒュームの功利主義)。ただし、反利己主義・利他主義を必ずしも意味しない。≠アダム・スミス問題の一般的解決 (行為者としての自己規制)。
- ▶ スミスの発達論的モラル・サイコロジー
 - 1) 原初的で非利己的な他者への関心。他者の行為や感情を見ること自体の喜び (観察欲求)。
 - 2) 他者も同じように自己を観察し判断していることの認識。観察される存在としての自己意識の発生と、観察者の判断を予期しつつ行為する行為者性の発展。
 - 3) 行為者として想定すべき観察者の一般化と内面化 (「公平な観察者」の形成)。
- ▶ 第一ステージから第二ステージへの転回。
 - 自分の行為や性格に関心をもつようになる前に、他者の行為や性格に関心をもつ。
 - 他者に対する道徳判断で用いられた基準を、自分自身に対しても適用するようになる。
 - 自分自身に対する道徳判断の複合性。観察者視点と行為者視点の想像上の往来。

1. スミス道徳心理学の発達論的構造

— 「観察する者」から「観察される者」へ (2)

- スミスが観察(者)と行為(者)の区別を意識的に論じていること、他者にかんする道徳的観察・判断と自己にかんする観察・判断の区分を強調していることの論証。
- 他者観察と自己観察をスミスが(分析的に区分するだけでなく)発達心理学的に理解していることの論証。
- 「相互的共感」の二側面の区別(既出)。「称賛への愛」は今日の“承認欲求”に相当。
⇒ 冒頭でのハチソン(主義)的な問題提示にもかかわらず、スミスの道徳理論は“共感されることの喜び” = “承認欲求”を基盤にして構築されている。
- 観察者の一般化・中立化(impartialization).
 - (広義の)主観主義・感情主義のメリットと欠点。経験論的ニュートン主義。
 - 主観性・偶有性の問題への応答としての「公平な観察者」。 Cf. 「一般的観点」

2. スミスにおける友愛と尊厳の徳倫理

- これまでのスミス徳倫理学の研究： 慎慮への注目、正義と慈恵の関係。
 - 1) 実質的には伝統的な徳倫理を放棄（消極的徳としての正義論）。
 - 2) 第6版改訂において徳と腐敗の問題が全面化（上級の慎慮論）。
- 本研究の視点： これまでほとんど検討されてこなかったもう一つの徳の分類学に注目。**友愛の美德**(amiable virtues) vs **立派さの美德**(respectable virtues)。
- 行為する他者の道徳的能力 = 徳としての「正義」や「慈恵・慈愛」。
 - ⇒ 自己反省的主体を前提せず、共感的観察者としての自己のみで正義と慈恵の徳は定式化することができる。つまり正義と慈恵は、発達第二ステージの言及せずに語れる。
- 自己の道徳的能力 = 徳としての「友愛の徳」と「尊厳・立派さの徳」。
- 「友愛の徳」は、共感的観察者としての能力・卓越性。 ⇒ ケア倫理へ。
- 「立派さの徳」は、観察者を意識する行為者としての能力・卓越性。
 - ⇒ 見知らぬ他者とのコミュニケーションが支配的となる文明社会においては、後者の能力が重視される傾向に。

3. 友愛の徳倫理とその限界 — 「見知らぬ者たちの社会」としての商業社会（1）

A. 友愛の徳 = 「観察者としての卓越性」。

B. 立派さの徳 = 「行為者としての卓越性」。

(※ スミス道徳心理学の観察／行為の構造を踏まえることで、この徳区分の定義が適切に理解される。)

- 友愛の徳 = 当事者の感情のなかへ入り込む(enter into)観察者の想像的能力。
- 人間愛に卓越した観察者は、自己中心的傾向を無理に抑圧することもなく、自然に見知らぬ他者(strangers)をまるで家族や自分自身のように感じることができる。
- 友愛の徳の限界 (1): 中国での大地震に対する「感受性に富んだ」ヨーロッパ人の反応。自己愛への本性的衝動を上回りうるのは、世界市民的な人類愛ではなく、自らを他者に恥じめ立派な存在に保とうとする道徳的行為者としての能力。

3. 友愛の徳倫理とその限界

— 「見知らぬ者たちの社会」としての商業社会（2）

- **友愛の徳の限界 (2):** 人間本性の自然的傾向性にくわえて、近代の商業社会の構造的特性が、友愛の徳を道德の基礎に据えることを困難にするという診断。
- ハイエクの反設計主義的な近代社会観（自生的秩序観）とも異なった社会の複雑性の把握。
- 「**見知らぬ者たちの集合体**」としての商業社会。各人の基本的必要を満たすためだけでも、諸個人は（匿名的で）インパーソナルな社会関係に決定的に依存しなければならない。
 - ⇒ 生活必需品を獲得する他者のほとんどは家族や友人ではないため、相手の好意に期待して恵んでもらえる見込みは薄い。他者の利益に訴え説得することで、自己の利益となる物財を「商品」として獲得する市場交換が支配的となる。慎慮の徳の重要性。
- 伝統社会においては、必需品（奢侈品ではなく）を獲得する相手のほとんどは親族や知人。そのため、友愛関係を基礎として生存を維持できる可能性は高い。このことは、「未開人」のほうが人間愛に富んでいるという属人的事態を意味しているわけではない。

3. 友愛の徳倫理とその限界

——「見知らぬ者たちの社会」としての商業社会（3）

- 商業社会で発達する「社会的徳」—— 作法の洗練、礼儀正しさ・上品さ。
- 異邦人が商業国民に出会ったときに期待できるのは、礼儀正しい振る舞い。他方で、人間愛や慈愛に満ちた無償の行為を期待できる可能性は低い。

では、非商業国民（未開・野蛮の民族）と出会ったときに期待できるのはどのような応答か・・・野蛮で攻撃的な反応？ 無償の歓待(hospitality)？
- ただし、スミスはこうした点に商業国民の冷淡さや道徳的退廃・腐敗を見出したわけではない。基調にあるのはむしろ商業文明への道徳的コミットメント（cf.「高貴ならざる未開人」）。

⇒ 商業社会で慈恵に依拠して生活するのが困難なのは、社会構造の相違が原因。仁愛が普遍的ではありえないのは人間本性の特質であり、その点では狩猟・牧畜民でも商業民でも変わりはない。

⇒ むしろ商業的交流の進展によって仁愛の対象が拡大する可能性を、スミスも認めていたように思われる。（共感の範囲の漸次的拡大により楽観的だったのはヒューム。ローティの「自民族中心主義」。）

4. 立派さとしての自己規制の徳 —公平な観察者の無関心性と情念の穏和化（1）

- 実践における友愛的性向と自己統制的能力のあいだのトレードオフ関係。

原理的には両方の徳は両立可能。しかし、徳は実社会での行為の反復によって習慣的に涵養されるが、友愛を育む社会環境と立派さの徳を育む環境は対立することも多い。

- **寛容・高潔さ**(generosity)の美德：人間愛と外観上は似ているが、質的にことなる徳。**人間愛**は、他人の感情や境遇に共感できる観察者としての感受性・繊細さにもとづく。対して**generosity**は、自分の視点を括弧に入れて「公平な観察者」の視点に立ち、他者や公共の利益が自己の利益を上回ると判断した際には、後者を断念(give up)するような人物が有する徳。第二ステージの反省能力が不可欠。

人間愛にもとづく行為は、自己否定や自己規制を必要としない。他者の苦境や歓喜があまりにありありと感ぜられる結果、自ずから善き行いがなされる。必要なのは、第一ステージに対応する観察者としての共感能力。

- Maria Pia Paganelliのスミス解釈の検討： (a) 感情の表出に対する寛容さは、人間愛というより感受性の高まりとして理解すべき。(b) たしかに英雄的な戦士やストア派の賢人のような驚異的な自己規制の発揮が求められる場面は商業社会では少ないが、普通の程度の自己規制能力は商業に不可欠の素質。

4. 立派さとしての自己規制の徳 —公平な観察者の無関心性と情念の穏和化（2）

- 「自己規制の偉大な学校」としての**世界・世間**(the world)。
近代化・文明化による見知らぬ他者との接触機会の増大は、慈恵を社会倫理の基礎に据えることを困難にする一方、自己規制の習慣を涵養する機会を拡大させる。
- 交流範囲の拡大は、(a)想定すべき観察者の不偏不党性(impartiality)を高めるだけでなく、(b)そうした観察者に是認される程度にまで自身の情念を**穏和化**させる(moderation)行為者の自己規制力を鍛える実践の機会を提供する。
- 情念の穏和化が必須となるのは、公平な観察者の**無関心性・冷淡さ**という性質によるところが大きい。道徳的判断に際して、バイアスはないが細部の事情への共感的関心には乏しい観察者。
 - ⇒ 観察者と行為者の**非対称性**。観察者が対象の感情に一体化しようとする志向の弱さ。
 - **本源的情念**（オリジナル）に対する**反省的情念**（コピー）の原理的な弱さ。
 - 商業社会で大きく作用する要因：見知らぬ他者への観察者の共感性は、身近な人間の場合と比較して弱まらざるをえない。**オイケイオーシス**の同心円構造。
- 公平な観察者（世間）の無関心な性格に対する肯定的評価：indulgenceの欠如。←→intimate friends

5. 道徳的価値の理論としての徳倫理 —現代倫理学との連関について

- スミスらの観察者理論は（道徳認識論としては）非認知主義、なかでも普遍的指令主義（表出主義）と一定の親和性を有し、また道徳的価値の存在論としては反実在論・反客観主義に近いとされる。 ※ただし道徳判断は真偽を問える（真理値を持つ）とする認知主義としての側面。
- 道徳的な価値は認識・判断主体から独立に客観世界に（自然的に）存在しているのではなく、主体は価値にとって構成的。⇒準実在論(Blackburn)や感受性理論(McDowellら)となら両立可能か。
- 道徳的価値の反実在論にむけられる典型的な批判は、価値を主観的なものへと貶め道徳の普遍性を否定してしまうというもの（特に主観の感情によって価値が構成されるとすれば尚更...）。道徳判断の主体の一般化・不偏化による価値の間主観的な普遍性の担保というスミスらの戦略は、「普遍化可能性」と共通。
- 普遍化可能性にもとづく価値の偶有化回避（安定化）戦略として、現代ではFitting Attitude理論が注目される。スミスの構成主義的価値論をFA理論の観点からどこまで解釈可能か？ ⇒詳細は当日配布資料で論じる予定。

本報告のまとめ

- スミス倫理学における友愛／立派さという徳の分類学の重要性。とりわけ、スミスの道徳理論と歴史理解（文明史観）との結節点として。
- 友愛／立派さの徳区分を理解する上での、スミスのモラル・サイコロジーの発達論的構造を把握することの意義。
- こうしたモラル・サイコロジーの基本構造と、それにもとづく徳の分類学の性格を理解することにより、現代倫理学（特にメタ倫理学）における議論と啓蒙期道徳哲学との親近性を確認し、両者の異同を比較検討することが可能となる。
- 啓蒙期の道徳哲学を合理主義、普遍主義、価値一元論、客観主義だけによって特徴づけることはできず、より感覚経験論的で心理学的に検証可能な現代的道徳モデルに近いものも、啓蒙思想のなかに見出すことができる。